

## 四国圏域生態系ネットワークの推進状況

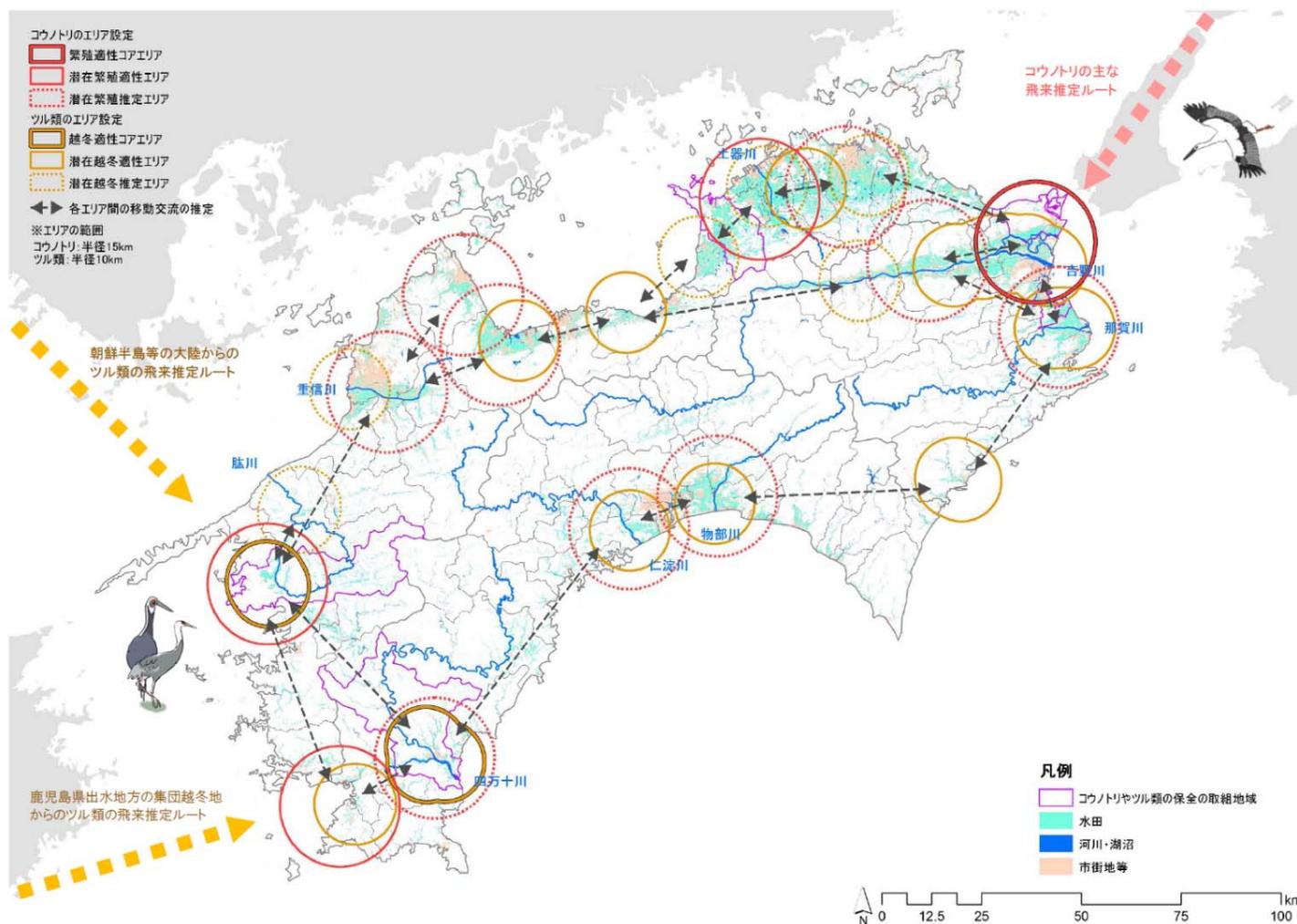
---

# 四国圏域生態系ネットワーク全体構想

四国圏域生態系ネットワークの形成に参加する様々な主体が取組の目的と目標を共有し、連携・協働して取組を円滑に推進するため、「四国圏域生態系ネットワーク全体構想」（2019年2月）を策定しました。

## 四国圏域生態系ネットワーク形成の目的

- 1 コウノトリ・ツル類を指標とした河川と取り巻く地域が一体となった自然環境の保全と再生に基づく四国全域における生態系ネットワークの形成
- 2 コウノトリ・ツル類を指標とした生態系ネットワークの形成を通じた四国全域における地域活性化及び経済振興の実現



全体構想図

## 指標種・シンボルとしてのコウノトリ・ツル類

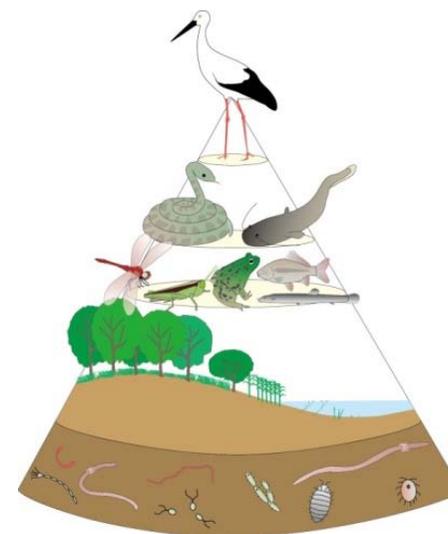
四国圏域において、以下の2つのシンボル性により、四国全体の広域的な指標種として、コウノトリ・ツル類を共通の指標・シンボルに設定しています。

### ①多様で豊かな生きものと自然環境のシンボル

コウノトリ・ツル類は、里地里山や河川の生態ピラミッドの頂点に立つ、高次消費者です。コウノトリやツル類が、その地域に生息することは、その食物となる多くの生きものが育まれている豊かな自然環境がある証であり、生態系サービスの質が高いことを意味します。

### ②自然と共生する社会のシンボル

コウノトリ・ツル類は大型の鳥類で、よく目立つことから、取組の効果を実感してもらいやすい生きものです。また、地域の人々の関心や支持を集めやすく、行動を引き出すことにつながります。コウノトリ・ツル類がくらしているという物語を付加価値とする生産物の販売や観光の推進、地域の交流人口の増加といった社会や経済の活性化への効果も期待できます。



### 日本国内のコウノトリの生息の現況



1971年に日本の野生コウノトリは絶滅しました。その後、コウノトリの保護増殖と放鳥が進められ、国内の野外個体数は徐々に増加して、2022年7月末に300羽を超えています。全国各地でコウノトリの飛来が確認されており、国内繁殖地も増えています。2022年には、徳島県鳴門市を含む全国8府県34巣で野外コウノトリが繁殖し、80個体の幼鳥が巣立ちました。今後、コウノトリの野外個体群の存続可能性を高めるためには、各地の生息環境の整備と並行して、個体群の遺伝的多様性を高める対策を進めていくことが必要となっています。

### 日本国内のツル類（ナベヅル・マナヅル）の生息の現況



かつては日本国内の各地にナベヅル・マナヅルの越冬地がありましたが、その多くは消滅しています。現在、鹿児島県出水地方では、保護区の設置、給餌等の長年の努力により、1万羽以上のナベヅル・マナヅル等のツル類が越冬しています。今期も、出水市での2021年11月27日のツル羽数調査で、16,840羽のツル類が確認されています。出水市へのツル類の一極集中による感染症等の発生や農業被害などが懸念され、分散に向けた取組が進められています。出水市では、2020年からツル類への給餌量を毎年1割ずつ、5年かけて半減させようとしています。

## コウノトリ・ツル類の生態

コウノトリは季節による移動をしないため、一年を通して日本国内で見られます。ツル類（ナベヅル・マナヅル）は渡り鳥で、越冬のために日本国内へ飛来します。

### ■コウノトリ



コウノトリ

#### コウノトリの生態

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年の生活 (留鳥)								移動またはその場に留まり越冬 幼鳥～若鳥：分散し単独または複数で行動（約4年で性成熟） 成鳥：単独またはつがいで行動 ※寿命は最大で40年（飼育個体による記録）				
生息環境	水田、池沼、湖沼、河川、湿地等を利用する。											
食物	夏期：魚類（ドジョウ、コイ、フナなど）、両生類（カエル）、昆虫類（バッタ、コウチュウ）等 冬期：魚類、両生類（カエル）、昆虫類、貝類、甲殻類（ザリガニ）等											
ねぐら	主に採食場所近くの電柱などの人工物や樹上を利用する。その他、河川の中州、山間の水を張った水田の利用も確認されている。											

#### コウノトリによる河川環境の利用

コウノトリは主に採食するために河川環境を利用する。水深30cm以下のワンド・たまり、浅水域などが重要である。  
コウノトリの食物となる魚類や両生類などの水生生物が豊富であることも重要である。

### ■ツル類



ナベヅル

#### ナベヅルの生態

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年の生活 (冬鳥)	越冬（おおよそ家族群または群れで行動するが単独のこともある）		渡り	国外で繁殖						渡り	越冬（おおよそ家族群または群れで行動するが単独のこともある）	
生息環境	水田、湿地、河川、海岸、干潟等を利用する。											
食物	植物（種子・根茎・葉）、昆虫、魚類等											
ねぐら	水田、湿地、河川、干潟等を利用する。											

#### ツル類による河川環境の利用

ツル類は主にねぐらとして河川環境を利用する。干潟、砂州など開けた場所の浅水域（水深10～20cm程度）が重要である。  
夜間にねぐらへ人や犬が立ち入らないことや車のヘッドライトなど人工光の照射がないことも重要である。

希少種情報につき、委員のみ

希少種情報につき、委員のみ

## 四国圏域、各流域での推進状況

四国圏域生態系ネットワーク推進協議会を2018年2月に設立し、2019年2月に「四国圏域生態系ネットワーク全体構想」を策定・公表しました。また、吉野川流域、四万十川流域で生態系ネットワーク形成を検討、推進する協議会が設立されています。2021年度に、吉野川流域の協議会は、那賀川流域を含む徳島県全体に拡大した協議会へ発展移行しました。

		●初年度	●2年度	●3年度	●4年度	●5年度	●6年度
		2017年度 (平成29年度)	2018年度 (平成30年度)	2019年度 (令和元年度)	2020年度 (令和2年度)	2021年度 (令和3年度)	2022年度 (令和4年度)
圏域／流域の空間スケールに応じた生態系ネットワークの形成	四国圏域	四国圏域の全体構想の検討・策定、圏域での取組状況等の共有・発信					
	四国圏域生態系ネットワーク推進協議会 【2018年2月5日設立】	・第1回協議会(2018.2.5)	・第2回協議会(2019.2.4) 全体構想の策定	・第3回協議会(2020.2.3)	・新型コロナウイルス感染症の影響により延期	・第4回協議会(書面開催)	・第5回協議会(2022.11.24~25)
	徳島県流域コウノトリ・ツルの舞う生態系ネットワーク推進協議会 【2021年1月15日発展移行】	全体構想の検討・策定、流域での取組状況等の共有・発信			全体構想の検討・策定、流域での取組状況等の共有・発信		
		・第1回協議会(2017.10.19)	・第2回協議会(2019.1.16) 全体構想の策定	・第3回協議会(2020.1.17)	吉野川流域→徳島県全体へ発展移行 ・第1回協議会(2021.1.15)	・第2回協議会(書面開催)	・第3回協議会の開催を予定
	鳴門地区生息環境づくりワーキング 【2018年11月27日設置】	旧吉野川での自然再生によるコウノトリの生息環境づくりの検討					
		・第1回会議(2018.11.27) ・第2回会議(2019.3.19)		・第3回会議(2019.11.5) ・第4回会議(2019.12.20)	・第5回会議(2020.12.14) ・第6回会議(2021.3.8)		・第7回会議(2022.5.17) ・第8回会議の開催を予定
鳴門地区地域・人づくりワーキング 【2019年9月30日設置】	コウノトリ営巣地周辺での地域・人づくりの検討						
			・第1回会議(2019.9.30) ・第2回会議(2020.1.10)	・第3回会議(2020.9.4) ・第4回会議(2020.12.14)	・第5回会議(2021.12.20) ・第6回会議(2022.3.17)	・第7回会議(2022.6.30) ・第8回会議の開催を予定	
四万十川流域生態系ネットワーク推進協議会 【2019年12月25日設立】	四万十川流域での取組状況等の共有・今後の方針の検討						
			・第1回協議会(2019.12.25)	・第2回協議会(2021.2.16)	・第3回協議会(2022.2.14)	・第4回協議会の開催を予定	
ワーキング 【2019年6月27日設置】	具体的な取組の検討・実施						
			・第1回～第4回会議	・第5回～第8回会議	・第9回～第12回会議	・第13回～第14回会議 ・第15回会議の開催を予定	

## 物部川、加茂川・中山川を基軸とした生態系ネットワーク形成の検討

四国圏域生態系ネットワーク全体構想で、「コウノトリ・ツル類のくらす自然環境と社会環境の条件が整っている流域や地域から先行して事業化を進め、順次、事業地域を増やしながらか、四国全域へのネットワークが広がる展開を目指す」とされています。

四国圏域では、すでに吉野川、那賀川、四万十川においてコウノトリ・ツル類を指標とした自然再生が進められています。これらの河川以外にも四国圏域の各河川にコウノトリ、ツル類が飛来しており、四国圏域生態系ネットワークを目指す、四国が一つとなった「魅力的な四国づくり」を実現するためには、河川を基軸とした生態系ネットワーク形成の取組箇所を増やしていく必要があります。

2021年度に、国管理の土器川、重信川、肱川、物部川、仁淀川、県管理の海部川〔徳島県〕、加茂川・中山川〔愛媛県〕を対象として、流域及び河川の概要、コウノトリ・ツル類の飛来・生息状況及び河川環境の状況を整理しました。これらの河川のうち、物部川、加茂川・中山川の周辺は、コウノトリ・ツル類がともに飛来していて、ツル類が河川や干潟をねぐらとして利用していました。

2022年度は、物部川、加茂川・中山川を対象として、流域の自治体や活動団体について情報収集・整理を行い、生態系ネットワーク形成に向けた検討を進めています。

物部川、加茂川・中山川を基軸とした生態系ネットワーク形成の検討状況

	物部川	加茂川・中山川
情報収集・整理	<p>◇高知県及び南国市、香南市、香美市が定める行政計画(総合計画、環境基本計画、生物多様性地域戦略、まち・ひと・しごと創生総合戦略等)を参照して情報を収集した。生態系ネットワークの形成に関連する施策として、水田に冬期湛水を行うなど地下水の保全につながる取組の実践、環境への負荷軽減に配慮した農業の推進、自然・体験型観光を基盤とした新たなツーリズムの推進等が確認できた。</p> <p>◇流域で活動している団体等の情報を収集した。生態系ネットワークの形成に関連する取組を行っている団体として、NPO、多面的機能支払交付金(農林水産省)の活動組織、漁業協同組合、企業、学校等が確認できた。</p>	<p>◇愛媛県及び西条市が定める行政計画(総合計画、環境基本計画、生物多様性地域戦略、生物多様性地域連携保全活動計画、地下水保全管理計画、まち・ひと・しごと創生総合戦略等)を参照して情報を収集した。生態系ネットワークの形成に関連する施策として、地下水以外の水を利用して休耕田や冬期の水田に水を張る「水田湛水」の可能性の検討、農薬・化学肥料を低減した農業や有機農業など環境にやさしい農業の拡大、地域資源を活用した観光プログラムの開発・ブラッシュアップ等が確認できた。</p> <p>◇流域で活動している団体等の情報を収集した。生態系ネットワークの形成に関連する取組を行っている団体として、NPO、多面的機能支払交付金(農林水産省)の活動組織、水産多面的機能発揮対策交付金(水産庁)の活動組織、企業、学校等が確認できた。</p>
関係機関への情報提供	<p>◇2022年9月20日に、高知河川国道事務所に対して、物部川周辺でのコウノトリ・ツル類の飛来・生息状況や物部川流域での生態系ネットワーク形成の取組の可能性に関する情報提供を行った。</p>	<p>◇2022年8月24日に、愛媛県西条市に対して、加茂川・中山川周辺でのコウノトリ・ツル類の飛来・生息状況や、加茂川・中山川流域での生態系ネットワーク形成の取組の可能性に関する情報提供を行った。</p>

希少種情報につき、委員のみ

希少種情報につき、委員のみ

## 水辺からはじまる生態系ネットワーク全国フォーラム

国土交通省・農林水産省・環境省の3省が連携して、生態系ネットワークの取組を推進しており、2017年から生態系ネットワークをテーマとした全国フォーラムが開催されています。

### 第6回 水辺からはじまる生態系ネットワーク全国フォーラム

【日時】2022年1月20日（木）14:00～15:30

【場所】オンラインでの開催（Zoomウェビナー）

#### 【プログラム】

- 全国の取組状況の報告
- 地域の取組状況の報告
  - 鮫田晋氏：いすみ市の自然と共生する里づくり
  - 舟越幹洋氏：これからの地域づくりにおける生態系ネットワークの役割・活かし方ー地域の報道機関の視点からー
  - 柴折史昭氏：吉野川からはじまるコウノトリ・ツルの舞う地域づくり
- 総括
  - 中村圭吾氏：総括～nature positive economyに向けて～

【主催】国土交通省 【共催】農林水産省、環境省

#### 【要旨】

- 千葉県いすみ市では全国に先駆けて2017年から、有機米「いすみっこ」を市内の小中学校の給食米の全量に利用。豊かな里山・里海の環境を活かし、食・農・環境教育を行うなど、自然と共生する持続可能な地域の「担い手」となる子ども達を地域全体で育成している。
- 斐伊川流域では、大型水鳥類5種（ガン類、ハクチョウ類、ツル類、コウノトリ、トキ）をシンボルに、ラムサール条約湿地に登録された穴道湖・中海を始めとする流域の水辺の保全・再生や、大型水鳥類等の地域資源を活かした観光などの地域の魅力向上に取り組んでいる。報道機関と連携し、取組を発信することで、さらなる市民参加を促進している。
- 吉野川流域では、協議会の発足を契機に、コウノトリやレンコン、酒蔵などの地域資源を結び付ける取組の試行が始まった。地域資源の組み合わせを通じて、地域の多様な主体や人がつながり、流域全体の魅力向上につながっている。
- 人を動かすには、「情」（熱い思い）、「利」（資金や利益の担保）、「理」（取組の見える化）が重要。生態系ネットワークの形成状況やその社会的な効果の見える化については、河川水辺の国勢調査などの既存の調査結果を活かして定量的に把握する指標や手法の開発が進みつつある。



鮫田 晋  
(いすみ市 農林課 主査)



舟越 幹洋  
(株式会社山陰中央新報社 編集局  
報道部 ニュース センター委員)



柴折 史昭  
(NPO法人とくしまコウノトリ基金  
理事・事務局長)



中村 圭吾  
(国立研究開発法人土木研究所  
水環境研究グループ 河川生態チーム  
上席研究員)

※所属は当時のもの



## 生態系ネットワーク形成の取組の資金調達の事例

### ■ガバメントクラウドファンディングの活用事例：栃木県小山市

「東日本初！野外繁殖で誕生したコウノトリのひなを羽ばたかせたい！～コウノトリの舞うふるさとをめざして～」

【応募期間】 2020年7月20日～2020年10月20日(93日間)

【目標金額】 2,000,000円

【達成金額】 2,107,000円(支援人数157名)

【寄付金の使い道】 コウノトリを育む渡良瀬遊水地の湿地保全、採食環境整備、コウノトリの見守り・監視活動 等

- ・外来魚除去作戦
- ・在来水生生物復帰
- ・観察マナーの啓発活動
- ・ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦 ほか

【返礼品】 渡良瀬遊水地ゆかりの品や、無農薬・無化学肥料の農産物 等



市民参加による外来魚の除去活動  
出典：小山市ウェブサイト

ラムサール条約湿地登録9周年  
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS  
本件は、国連持続可能な開発目標(SDG)のGOAL15「陸の豊かさを守ろう」に貢献しています。

# 渡良瀬遊水地 ヤナギ・セイタカアワダチソウ 除去作戦

ラムサール条約湿地「渡良瀬遊水地」は、栃木・茨城・群馬・埼玉の4都府県にまたがる面積約3,300haの国内最大の遊水地です。洪水から首都圏を守る治水の要であるとともに、絶滅危惧種を数多く含む貴重な動植物が生息・生育し、生物多様性のシンボルでもある国の特別天然記念物「コウノトリが定着する「自然の宝庫」です。小山市では、この貴重な湿地環境を保全するため、断続的・継続的・組織的・体系的な取り組みを推進し、「ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦」を2014年度から実施しており、7年度で延べ約15,800人のご参加をいただきました。みんなの力を合わせて、渡良瀬遊水地の未来を守りましょう！

＜2021年度実施計画＞  
6月26日(土) AM7:30～  
10月9日(土) ※中止※  
11月28日(日) AM9:00～  
各回30分前より受付開始  
詳細は小山市ホームページをご覧ください  
<https://www.city.oyama Tochigi.jp>

お問合せ先  
小山市役所 総務部自然共生課  
TEL: 0285-220354

＜小山市渡良瀬遊水地湿地保全サポート団体＞  
2019年度に実施したすべての「ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦」に5人以上で参加いただいた企業・団体等の皆さまです。(15団体、五十名超)  
※2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため参加を中止して開催させていただきます。

アクリグ株式会社、南足利銀行、瀬田建設株式会社、思川西部土地改良区、小山市北桜高校、株式会社、大和ハウス工業株式会社、株式会社、株式会社、西原・ヴェオリア・シエネット、日本環境クリアー特定業務委託共同企業体、日本無極株式会社、社会福祉法人ハステル、水戸証券株式会社、郵便局、西ヨロズ栃木渡良瀬遊水地での湿地保全活動を独自に継続して実施いただいている企業・団体等の皆さまです。

MS&ADインシユアランスグループ (2014年～)

主催：小山市、野木町、小山市教育委員会、「渡良瀬遊水地再生委員会」外来種対策・普及啓発・環境教育促進協議会  
協賛：国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、栃木県、一般財団法人渡良瀬遊水地アクション・ネットワーク  
特別協力：(株)伊藤園

「ヤナギ・セイタカアワダチソウ除去作戦」チラシ  
出典：小山市ウェブサイト